

二、十方衆生

十方衆生

「設い我佛を得たらんに……」と誓い給ひし法蔵菩薩は、直ちに「十方衆生！」と、一切衆生を招喚していられる。

四十八願ごとくが、聖なる如来願心の表現ではある。然し、第十七願までに於いては、第一の無三悪趣の願をはじめとして、六神通の願、更に第十一願必至滅度の願、十二・十三の光明無量、寿命無量の法身成就の願、やがて十七願、諸仏称名の願等の、極めて重要な諸願を聞いたけれども、「十方衆生よ」との親心は、はじめて第十八願に出て来たのである。

思うに、如来真実の本願は、十方衆生を救済することが、その生命でなくてはならない。であるから、その困位、法蔵の本願は、十方衆生の上に立てられなくてはならない。今如来は、その正覚成就が直ちに十方衆生のためであり、十方衆生をその内容としてのみ、如来の正覚成就が可能であることを直ちに、端的に現はされたのである。

我等は、この如来の願意を如何に領解すべきであらうか。

思うに如来は、十方衆生に何ものかを求め、何ものかを与えて、衆生と如来とを根本に於いては、一如一体なるものたらしめて、衆生をして、如来の眷属たらしめ、それを通して、如来の莊嚴浄土を可能ならしめたまう願意でなくてはならない。

然るに、一切衆生は、はたして是の如き自覚を有する衆生であらうか。

衆生が、貪欲を生命とし、我執を本性とする以上、個々の衆生は、それぞれ対立分離して、尊き何ものをも成就しようとせず、特に我執は、それ自体が正法に反逆し、所謂五逆誹誘正法の無間業を造るものである。

しかしかくの如き群萌も、如来の願心にさめて、如実の衆生たらねばならない。

親鸞聖人は、この如来の招喚の願意にさめて、念仏せられたのである。真に佛を念ずる衆生こそは、如来久遠の隙意に目覚めたものでなくてはならない。十八瞬における衆生とは、実にかかる衆生のことである。如来の招喚にさめたる衆生のことである。親鸞聖人は、この如来招喚のみ声にさめて、

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。」

と告白せられた。如来は十方衆生と誓い、聖人は「一人がため」と領解せられたが、この十方衆生と一人とを、如何に考えたらいいのであろうか。

世間の通俗者流の中には、「如来が、汝の傷つけ痛めたる十方衆生の呪いは、この親が引き受けたぞ！」と云われることである。十方衆生を引受けて下さるから、私一人が助けられるのである。」との、説をなす者があるけれども、それでは、再び私は、責任回避、因果無視の外道の野に彷徨うことになる。又、一切衆生の中の我以外の全てを引受けられた所で、我一人の全ては如何になるのであるか。

憶うに、如何なる八萬四千の経説も、菩提樹下に於ける、釈迦自証の一念をはなれては、何ものもあり得ない。すでにその自内証の風光である。大無量寿経も亦、これをはなれてはなく、従って如来の本願も然りである。

聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」と、告白されたことも、それは信の内的風光であつて、如来の「十方衆生」の招喚と一致するものでなくてはならない。誠に我に囚われたる衆生の欲心は、決して「十方衆生よ」との声を、喜ばぬものである。

「あなた一人」とよばれることをこそ、喜ぶのである。「あなた一人を」とよぶ声は、愛である。又それを喜ぶ心も亦、愛である。我等の内観の世界において煩惱の声を聞く時、容易に知ることが出来るのは、如何にこの愛に渴けるものであるかと云うことである。

龍樹はすでに、十住毘婆沙論の巻頭に於いて、

「愛に随える凡夫、無始よりこのかた、常に其中に行じ、生死の大海に往来して、未だ曾て彼岸に到ることを得ず。」

と断じている。愛に随ふとは「あなた一人」と呼び、「あなた一人を」と呼ばれることを求める心である。聖人の「親鸞一人がため」とは、この愛の心であつたであろうか。何人と雖も、否と答えるであろう。

然るに衆生の欲心は、決して十方衆生よ、との声を喜ばぬものである。「あなた一人を」と呼ぶことを真実と思ひ、「あなた一人が」とよばれることを嬉しく思う。然し、それは愛であつて、真実の慈悲ではない。

愛に随う所に、凡夫の無始永劫の流転があるとの、龍樹大士の、み言葉をも引いておいた。

誠に衆生の貪欲は、我一人において利益し、享樂し、権勢を求め、異性を求め、集めて集めて私の満足を求めようとする。「あなた一人が」との囁きは、天上の声の如く響き、「あなた一人のために」との声は、渴ける喉に水の如く、入り易く受け易いのである。しかも、かかる声はやがて、必ず、飽き疲れ、傷つき、悩み、より深き渴愛へとつれてゆく。これ龍樹が、「愛に随える凡夫、無始よりこのかた、常に其中に行じ、生死の大海に往来して、未だ曾て彼岸に到ることを得ず。」と説き給ひしは、如何に愛の心の深いかを、内観し給ひし、告白の声ではあるまいか。

この愛の世界は、純粹な満足を与えるものではない。一步あやまれば、量り知られぬ無明の深淵にとつれ込まれる。そこで、この大地の愛について、深い反省がおきて来るにつれて、別なる世界を求めはじめらる。

まづ人であれ

如来はすでに「十方衆生よ」と喚ぶ、と云うことが、如来の大慈悲を現はすものである。如来の本願とは、南無阿弥陀仏がもつ願意である。それ自体、愛を超えたる大慈悲である。

蓋し、一切衆生は差別である。差別を持ちつつ、しかも差別に囚はれたるものである。賢愚、善悪、淨穢、男女、老少、貴賤等々の対立に於いて生きるものである。或者は、教師であり、或者は、検事であり、小使いであり、華族であり、平民でありつつ、異つたそれぞれの業に、従へるものである。その有為の相が、何時しか固執され薰習して、人間である前に、教師となり、検事となり、地主となり、小作となり、貧

者となり、それぞれの世界に於いての、特殊の雑音のみを聞くに至るのである。

人間が歩かないで、判事が歩き、人間が生きないで、高等官が生きることが、人間の墮落である。小我、個我、特殊に囚はれて、それを自我と考へて、他人を劣等と考へ、悪人、愚者と蔑むに至つて、既に深き迷路を辿るものである。其処に聞こゆる願は、特殊なるものの「汝よ」と呼ぶ声である。

然るに、かかる迷路を辿る衆生が、善悪、賢愚、淨穢を超えたる、彼岸の如来の招喚の声を聞くことに依つて、小我より普偏我へ、差別より平等へ、即ち、本当の人間に帰るのである。我に帰るのである。

釈尊や、親鸞聖人は、教師にあらず、布教使にあらず、学者に非ず、その他一切でなくて、唯、偉大なる「人」であつた。それは言うまでもなく、「十方衆生よ」と喚ぶ、彼岸の如来の声が、其処に「全人」としての人を、生み出すのである。

夫は夫である前に、人であり、妻は妻である前に人であつて、そのいずれもが、不偏平等の招喚に覚めたる全人である時、夫は夫にして、いよいよ夫たる徳を發揮し、妻は妻として、いよいよ婦徳を發揮するのである。地主は地主である前に、人であつて、路傍の乞食と平等尊重の絶対存在であることを自覚するならば、その恵まれたる特権に閉じ籠る、高慢無礼の迷路から救はれ、貧者は貧者で、その分に安んじて、敢えて自らを卑下し悲観しないであろう。

命題

今、私の机上には、美しい西洋草花が、紅色の花を咲かせている。彼はあらゆる雑音を聞いて生れたのではなくて、太陽の招喚に應へて、この緑の葉を持ち、紅の花と咲いたのである。

一切衆生一人として聞かねばならぬ声、如何なる者も、この声を無現しては、その本性に帰り、その本性を發揮することの出来ない唯一なる声こそ、如来招喚の声でなくてはならない。寒さといふ現実の苦悩と、太陽の招喚とによつて、梅花の香しきがあるが如く、人生の苦悩と、如来招喚の声とが一体になつて、差別に生きつつ、平等一如の香を有する菩薩が誕生するのである。太陽が、個々の苦悩、現実の部分の苦悩に於いて無関心であつて、決して「汝よ」と、個だけの幸福を囁かないと同じく、如来は、実に、一切衆生の名において我を喚ぶのである。衆生の近視眼的な、刹那の部分の、苦楽について、愛を囁かないで、全体として、これなくしては、生活はあり得ないという、高き普遍的立場に於いて我を招喚するのである。

即ち、南無阿彌陀佛は、一切衆生の無視することの出来ない命題である。故に、南無阿彌陀佛は不偏平等、即ち時について言えば、過去久遠の古も、尽未来際の永遠にも、處について言えば、東西南北のいずれを問わず、尽十方に響流する、永遠に今なる絶対の声である。この声を無現しての生活は、一切衆生を自損々他するものであり、闇から闇を辿る流転であつて、其処には、真実はあり得ないのである。

全人

親鸞聖人の「親鸞一人がためなりけり」との告白は、この十方衆生よ、の招喚をそのままに、自己の上に受領せられたる声であつて、「あなた一人」と囁いた愛欲に應えられた言葉ではない。又、我一人といふ欲心をもつて向はれた言葉でもない。

即ち、其処には、大慈悲に相應する如実の心が動いている。それが即ち、後に論ぜられる「信」であるが、この信は、如来の十方衆生よとの、真実大慈悲に如実相應する心なるが故に、煩惱の欲心ではない。清淨真実にして純粹なる「まことのこころ」である。

多くの求道者は、十方衆生よ、と呼びたもう如来の願意に徹しないで、あくまで功利的欲心をもつて本願力を求めて、聖なる如来を弄び、十八額の世界に至り得ないで、あくまで二十願の化土にとどまるのである。されば「親鸞一人」とは、「住岡は広島に一人で帰った。」と云うが如き、抽象的一人ではなく、十方衆生を内容とせる具体的一人である。

思うに衆生は、それ自体苦悩の中に居つつも、苦悩と我とを何処までも抽象せんとし、十方衆生と共にありつつも、十方衆生と水油、相逆いつつあるものである。この「逆」の態度こそ、凡夫の特徴であつて、天地に逆い、如来に逆い、眞理に逆い、人生に、生死に、十方衆生に逆いつつ、己一人の幸福を固執するものである。この限りにおいて衆生は抽象的である。

然るに若し、如来の招喚にさめて、如来の願心に生きる衆生は、正しく人生に随順し、苦悩を合掌のうちに受取つて、人生と具體的の一体に生きるのである。然れば如何にして、かかる世界に至るのであろうか。

内観の世界

如来の十方衆生よ、と喚ぶ声にさめて、「親鸞一人がため」と、領解せられたる聖人は又、自らのことを愚禿と名告られた。

愚禿とは、罪惡深重にして愚なるものなりとの自覚であるが、かかる自覚は、決して、外面的な、常識的な、言葉の挨拶や、行為言動の説明ではなくて、それが全く聖人の内観の世界における自照の告白なるが故に、我等に深い感銘を与えるのである。

蓋し、信の自覚においては、人生や一切衆生を内観の世界に於いて発見するのである。八萬四千の音、色、光、香等々の刺戟によりて、八萬四千の受答をなす一々の煩惱は、一切衆生の相に外ならない。若し宗教的主体たる如来本尊が、何等の自覚反省をもおこさしめないで、唯、衆生の欲心の満足をのみ誓うならば、迷信であつても正信ではない。然るに如来は、無上命令となつて衆生に君臨し、その迷妄を全的に否定し、その否定を通して、如来の真実を全肯定する。この絶対他およびかけが、我等の自覚内容となるのである。而してかかる否定に依つて、其処に八萬四千の煩惱は、照破されるのである。

この内観自照によつて、一切衆生の如実の相を発見する時、愚禿の自覚は生ずるのである。

誠に聖人は、一切衆生の苦悩を我において抱き、一切衆生の煩惱を我において見出し、一切衆生の問題を我が問題と悩み、一切衆生を代表して、如来の本願に應へられ

たのである。即ち、愚禿は一切衆生より抽象された一人ではなくて、一切衆生と一体なる具体的一人である。

由来、凡夫は悪人愚者にして、聖賢は、透明清浄なること水晶の如くであらうと考へられるが、それは常識的な考へであつて、我慢なる悪人愚者こそ、自ら善人なり、賢者なり、と自惚れて、罪悪深重、無慚無愧、散乱放逸を知らざるものである。十悪五逆、無明煩惱しげくして、塵数の如く遍満し、愛憎違順することは、高峰岳山もことならず、を諦観することの可能は、唯、如来の智慧光に生きる正定聚の人にのみ可能である。而して、内にこの悪業煩惱に充満せるを、深信せざる限り、邪見高慢の頂きの上つて何時までも一切に反逆して、如来の願意に相應することは不可能である。

再び言う、如来の 大寂定に通ずる正定なくして、何で、動乱はてしなき煩惱の海を觀じ、如来不滅の燈炬なくして、何で八萬四千の群賊悪獸の相が見られよう。

かくて「十方衆生よ」との喚び声によつて、この煩惱悪業に覚め、貪欲を貪欲と知るが故に、貪欲を超えて、如来の願心に純なる歸命を捧げ得るのである。

然れば、その歸命の心は、如何にして發起するのであらうか。